

『古事記』におけるタカミムスヒの役割

主 山 倫太郎

(国文学専攻博士後期課程一年)

一、はじめに

『古事記』上巻の「国譲り」「天孫降臨」神話において、天神の中心的な存在にアマテラスとタカミムスヒの二柱が挙げられる。「国譲り神話」の発端は、アマテラスの次のような発言からである。¹⁾

天照大御神の命以て、「豊葦原千秋長五百秋水穗国は、我が御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らさむ国ぞ」と、言因し賜ひて、天降しき。【葦原中国の平定】

アマテラスがオホクニヌシの治める地上を所有しようとして、子のオシホミミを降臨させようとするが、地上は悪しき神々がいるとの理由で、オシホミミが降臨することを拒む。そこでアマテラスは地上を平定させようと、天神らを招集し天の安の河原で会議を行う。この会議の面々の中で、アマテラスと共に天神らの中心的存在なのがタカミムスヒである。タカミムスヒは、『古事記』神話の冒頭部

分にて「造化三神²⁾」の一柱として登場するが、その後一度身を隠す。そして先のアマテラスの発言を機に再登場し、アマテラスと共に地上平定に向けて活躍をする。

タカミムスヒの行動を多く示しているのが「国譲り」「天孫降臨」の場面であり、造化三神の一柱としての登場から再登場するまでの過程や経緯は全く触れられていない。さらにタカミムスヒは途中で「高木神」という別名に転じ、アマテラスと引き続き行動をする記述が『古事記』にある。³⁾

本稿では、この神が国譲り神話に登場し、『古事記』においてその活躍がどのような意味を示しているのかを論考したい。

一、タカミムスヒの登場

タカミムスヒは、先述したようにまず『古事記』の冒頭部分にて「造化三神」の一柱として登場する。その記述は次の通りである。

天地初めて発れし時、高天原に成りし神の名は、天之御中主神。

次に、高御産巢日神。次に神産巢日神。此の三柱の神は、並に独神と成り坐して、身を隠しき。【初発の神々】

高天原という天上界に先ず三柱の神が独神として成り出る。最初に出た神アメノミナカヌシは完全に姿を消し、二度と登場することはない。

一方のタカミムスヒとカムムスヒは、アメノミナカヌシと同様に一度身を隠すが、その後で個々に活躍が記述される。本稿の主題であるタカミムスヒは、「国譲り」の条から再登場し、場面によって別名とされるタカギ（高木）神と同一の神として、アマテラスと共に高天原において天神らの中心的な存在として君臨する。最後のカムムスヒは、スサノヲのオホゲツヒメの殺害すなわち「五穀起源神話」から再登場し、国神らの御祖（母神）的存在とされる。⁽⁴⁾

それでは、タカミムスヒが再登場する「国譲り」から「天孫降臨」の条までの用例を以下に挙げ、どのような行動が見られるのかを確か認してみよう。

二、タカミムスヒの用例

1、爾くして、高御産巢日神・天照大御神の命以ちて、天の安の河の河原に八百万の神を神集へて、思金神に思はしめて、詔ひしく、此の葦原中国は、我が御子の知らさむ国と、言

依して賜へる国ぞ。（葦原中国の平定）

2、是を以ちて高御産巢日神・天照大御神、亦、諸の神等を問ひしく、葦原中国に遣はせる天善比神、久しく復奏さず。

（同）

3、故爾くして、天照大御神・高御産巢日神、亦、諸の神等を問ひしく、天若日子、久しく復奏さず。（天若日子の派遣）

4、爾くして、其の矢、雉の胸より通りて、逆まに射上がりて、天の安の河の河原に坐す天照大御神・高木神の御所に逮りき。是の高木神は、高御産巢日神の別名ぞ。故、高木神、

其の矢を取りて見れば、血、其の矢の羽に著けり。是に高木神の告らさく、此の矢は天若日子に賜へる矢ぞとのらして、即ち諸の神等に示して詔はく、命を誤たず、悪しき神を射むと為る矢の至れらば、天若日子に中らずあれ。（同）

5、是を以て、此の二神、出雲国の伊耶佐の小浜に降り到りて、十掬の剣を抜き、逆まに浪の穂に刺し立て、其の剣の前に踏み坐て、其の大国主神を問ひて言ひしく、天照大御神・高木神の命以ちて、問ひ使はせり。（建御雷神の派遣）

6、爾くして、天照大御神・高木神の命以て、太子正勝吾勝速日天忍穗耳命に詔ひしく、今、葦原中国を平げ訖りぬと白す。（天孫降臨）

7、此の御子の高木神の女、万幡豊秋津師比売命に御合ひして、

記載箇所	備	考
1、国譲り条	タカミムスビ・アマテラス	
2、同	タカミムスビ・アマテラス	

以上、『古事記』におけるタカミムスビの記載例を挙げた。1～10で挙げた記載例をまとめてみると以下ようになる。

- 8、故爾くして、天照大神・高木神の命以て、天宇受売神に詔ひしく、汝は、手弱女人に有れども、いむかふ神と面勝つ神ぞ。(同)
- 9、故、天つ神御子、其の横刀を獲し所由を問ひしに、高倉下が答へて曰ひしく、「己が夢みつらく、天照大神・高木神の二柱の神の命以ちて、建御雷神を召して詔はく、「葦原中国はいたく騒ぎてありなり。」吾が御子たち、やくさみすらすし。その葦原中国は、専ら汝が言向けつる国なり。かれ、汝建御雷神降らさね」とのりたまひき。(神武東征、高倉下の条)
- 10、是に、亦、高木大神の命以て、覚して白ししく、天つ神御子、此れより奥つ方に便ち入り幸すこと莫れ。(神武天皇八咫鳥の先導)

3、同	アマテラス・タカミムスビ
4、同	「高木神」という別名に転じ、以下この神名で表記されアマテラス・タカギとなる。
5、同	アマテラス・タカギ
6、天孫降臨条	アマテラス・タカギ
7、同	アキツシヒメの父であり、ニギの外祖父として記される。
8、同	アマテラス・タカギの順でアメノウズメに指令する。
9、神武東征条	高倉下の夢に登場し、アマテラスが先に記される。
10、同	高木大神として八咫鳥の派遣し、イハレビコに指令する。

以上の記載例と表から見受けることができるタカミムスビの特徴は次の三点である。

- ①舞台は「高天原」(皇室側)であり、必ずアマテラスと共に行動している点。
- ②行動およびその性格は政治的な面が強く、天神らに司令する神である点。
- ③神名に「産巢日」とありながらそれに相応しい行動が一切見られない点。
- ①と②の解釈として、「高御」という語は倉野憲司⁵⁾のいう「高天

原」との関係強く示して、「皇室の側（現事・顕事）における生成の根源神」という解釈がある。つまり、この語を有しているからこそ、タカミムスヒが高天原に働く存在なのである。

尾崎暢殊も「高天原を主宰する神で、政治的な役割をうけもって活動する神としている。」とし、また西郷信綱のいう「高天原のパンテオンの形成」をこの神が存在していることで保証していると考えられる。

③の解釈は、西郷の論を参考にする。

古事記冒頭にあらわれるタカミムスヒ・カミムスヒという神の名は、これらあまたの

地方的なムスビの神たちを中央で集約したものに他ならないのではないか。

このような視点は、溝口睦子や倉塚暉子も同様で、西條勉も「タカミムスヒやカムムスヒに先祖を求める氏族は多い」と論じている。タカミムスヒ（氏族）とアマテラス（天皇）の関係を考察するにあたって、これら四氏の指摘は非常に重要な視点であり、タカミムスヒという神を解明する大きな手がかりとなる。

そこで、次は氏族の由来を記した『新撰姓氏録』と『新撰姓氏録』が参照した『古語拾遺』を用いながら考察を試みることにする。

四、『新撰姓氏録』と『古語拾遺』におけるムスヒ系の氏族

『新撰姓氏録』（以下、『姓氏録』と表記）は国家の一大事業として平安時代初期の八一五（弘仁六）年に嵯峨天皇の命によって万多親王らが編纂し、九世紀に完成された古代氏族の名鑑である。この書は、京都を含めた畿内に住む一一八二氏をその出自により、近畿の「山城」・「和泉」・「河内」・「摂津」の地方の国と宮中の「左京」・「右京」の氏族を大きく「皇別」、「神別」、「諸蕃」の三つに分類し、不明のものは「未定雑姓」となっている。

そして、その中の「神別」が、神々を先祖とする氏で、「神別」はそこから「天神」、「天孫」、「地祇」とに分別されている。『姓氏録』を通覧してみると、以下の通りにまとめられる。

- ・ 皇別（三三五氏）
- ・ 神別（四〇四氏）——天神（二七三氏）・天孫（一〇三氏）
- ・ 地祇（二十八氏）
- ・ 諸蕃（三二六氏）

当時の古代社会において、支配階層に属する「氏族」は右に記した分類の中のどれかに属している。さらに「神別」の中でも「天神」

と「地祇」に組まれる氏族があり、それが本稿の問題と大きくかわる。

「神別」の姓氏とは、カムヤマトイハレビコ（神武天皇）以前の神代に別れたあるいは生じた氏族である。「神別」の姓氏はさらに天孫ニニギが降臨した際に付き添った神々の子孫を「天神」とし、そのニニギから三代の間に分かれた子孫を「天孫」、天孫降臨以前から土着していた神々の子孫を「地祇」として三つに分類している。

その中で「天神」に分類された姓氏は藤原や大中臣など二七三氏、「天孫」は尾張、出雲など一〇三氏、「地祇」は安曇、弓削など二十八氏がある。

それでは問題となる「天神」に属する氏族と「地祇」に属する氏族は、どのような神を祖としているのか。神別氏族の祖神の名とその氏族数を「」表記で以下に挙げてみることにする。

「天神」↓カムニギハヤヒ（神饒速日尊）「一〇六氏」、アメノミナカヌシ（天御中主尊）「三氏」、タカミムスビ（高皇産靈尊（高魂命））「三十二氏」、カムムスビ（神皇産靈尊（神魂命））「五十氏」、ツハヤムスビ（津速魂尊）「四十三氏」、ツノコリムスビ（角凝魂命（角凝命））「十四氏」、フルムスビ（振魂命）「七氏」、ムスビ（牟須比命）「八氏」

「地祇」↓オホクニヌシ（大国主命）・スサノヲ（素戔嗚命）「十三氏」¹²⁾、ワタツミトヨタマヒコ（海神綿積豊玉彦命）「七氏」、シヒネツヒコ（稚根津彦命）「六氏」

以上の神別氏族と祖神名を見てわかるのは、「天神」に分類されている神の多くがムスビ神であり、ニギハヤヒとアメノミナカヌシを除くとすべて「ムスビ」神である。ゆえに、『姓氏録』において「天神」＝ムスビ神であることと、その一方で「地祇」はオホクニヌシやスサノヲといった「国神」を祖としながらも、それら¹³⁾を祖とする氏族は少数であることがわかる。

「天神」に属する神々の中で「アメノミナカヌシ、タカミムスビ、カムムスビ」は『古事記』冒頭に記述されている造化三神で『日本書紀』にも登場する神である。カムニギハヤヒも両書に登場するニギハヤヒと同一視して良いだろう。

あとの四つのムスビ神は両書には見られないが、今日において朝廷を守護する宮中八神の一柱として宮中で祭祀され、毎年六月と十二月の年に二回行われた国家的祭祀である「月次祭」の祝詞に挙げられている神である。

宣長はこの祭祀を「つきなみのまつり」という名称からみて、「もともと毎月行われていたのだろう。」と指摘している。¹⁴⁾七世紀以前のことは記録や文献が無いので詳細は不明だが、八世紀以後の祭祀に

ついでには神祇令に明記されている。

それによると、数多ある宮中祭祀の中で、二月に行われる祈年祭とその年の二回にわたって行われる月次祭に限り、百官が神祇官に参集し、祭祀を司る中臣氏による祝詞の宣上ならびに、同じく祭祀を司る忌部（斎部）氏による班幣が行われると規定されている。

従って宮中祭祀の中でも殊更に重要視されていた祭りであったと言える。しかも注目すべきことは、この祭りは天皇自らが祭祀していたということである。天皇の側近である中臣氏や斎部氏が祭るのではなく、天皇自身による祭祀という意味は非常に大きく、このような側面からも「ムスヒ神」が氏族に限らず、天皇の側からも重要な存在として認識されていたと考えられる。¹⁵⁾

例えば「ムスヒ」を祖として掲げる有力な氏族には中臣（ツハヤムスヒ）・大伴（佐伯）・久米・斎部（タカミムスヒ）・賀茂・紀直（カムムスヒ）らといった諸氏である。また、「ハヤヒ」（ニギハヤヒ）を祖とするのは物部氏が代表として挙げられる。

物部氏に限って「ハヤヒ」を祖としているのは、物部氏の立場が特殊なものであることを示しているのだらう。¹⁶⁾残ったアミノミナカヌシは『古事記』では最初に出現した天地開闢の神として「本文と「序文」には記されているが、その神名からもわかるように、抽象的な神格で全く活躍はない。

西郷¹⁷⁾は「ほとんどはたらしきをしていないのは、一種の論理的な要

請にもとづいて考え出された神だからであろう」と指摘する。従って、アミノミナカヌシは氏族の祖神としての実感からは縁遠いと考えられる。実際、先述のようにアミノミナカヌシを祖とする氏族はわずかに三氏となっていることから、社会的に力が弱かったと伺える。

以上のことより、「天神」の中で、もつとも注目すべき存在は「ムスヒ」と「ハヤヒ」系の氏族であるということが考えられ、その中でもタカミムスヒは『姓氏録』はもちろん、『古語拾遺』、宮中八神殿の中やムスヒ系の中でも必ず筆頭に置かれる神である。

このタカミムスヒを祖とする代表的な氏族は、先に記した氏族数「三十二氏」の中から、以下の五氏を掲げて考察する。¹⁸⁾

大伴連、佐伯連、忌（斎）部連、弓削連、玉祖連

これらの五氏は古代より天皇の側近中の側近であり、後述する各氏族の解説にあるとおり、忌（斎）部氏は中臣氏と共に朝廷の祭祀を司る氏族である。これらの氏族を解説すると次のようになる。

・大伴、佐伯氏↓この氏族の祖神は、天孫降臨の条にて、ニニギを先導した神の一柱アミノオシヒ（天忍日命）である。『古事記』『日本書紀』では、この神の系譜や

出自が記述されていないが『古語拾遺』によると、タカミムスヒを親に持つという系譜がある。また、佐伯氏は大伴氏の同族となっている。

て取り上げる。

【天神系】

タカミムスヒの後裔であるアメヒワシカケルヤ（天日鷲翔矢命）の子孫を称した、弓削部の総領的伴造で、姓は連であったが、嫡流は天武朝において朝臣に改姓した。雄略朝の弓削豊穂、六世紀頃の弓削倭古、持統朝の弓削元宝がこの系統の氏人となる。

・忌（斎）部氏↓朝廷における祭祀を司る氏族で、天の岩屋神話で登場するフトタマ（太玉命）を祖とし、この神もまた『古語拾遺』ではタカミムスヒが親となっている。なお、この氏族は後に斎部氏となり、後裔の斎部広成は官人として勅命に従い、また自身の氏族の朝廷内における存在感を示すため、神代以降、奈良時代の天平年間（七二九〜七四九）にいたるまでの歴史を略述し、斎部氏が神事に奉仕してきた由来を語り、さらに当時の朝廷の祭祀の不備な事項をあげ、斎部氏に対する不当な処遇を訴えた『古語拾遺』を編纂している。

・玉祖氏↓玉造部を祖とし、岩屋隠れの際に八尺瓊勾玉を作った。

天孫降臨の際、ニニギに付き従って天降るよう命じられ、アメノコヤネ（天児屋命）、フトタマ（布刀玉命）、アメノウズメ（天宇受売命）、イシコリドメ（伊斯許理度売命）と共に五伴緒の一柱として随伴した。

・弓削氏↓弓の製作をする弓削部の統率氏族で、物部氏との関係も深いとされる。複数の氏族があり、各時代に現れる人物がどの系統に連なるかを捉えることは難しいが、『姓氏録』に基づくと主に【天神系】【天孫系】【地祇系】の三つの系統があったとされるが、ここでは【天神系】に限っ

このように、以上の五氏族の祖神はいずれもアマテラスやその子孫を補佐し、天神たちの中でも有力な重鎮であることを示している。そしてその祖神の親にタカミムスヒというアマテラスの片腕的な存在を置くことで、自分の一族が古来よりアマテラス（天皇）に付き従ってきたことの正統性と所以を語ろうとしたのである。

しかし、五氏の祖神は『古事記』や『日本書紀』に登場してはいないものの、タカミムスヒが親神であるという系譜はない。こうした

『古事記』や『日本書紀』にはない系譜を付したのは編纂者独自の創作であろう。¹⁹それではなぜ、このような創作をしたのだろうか。

『姓氏録』に関して言えば、代表氏族の解説でもあるように『古語拾遺』を参照したからであろう。『古語拾遺』は『姓氏録』が完成する八年前に編まれた歴史書である。

ゆえにこの問題は『古語拾遺』が編纂された背景と編者の齋部広成の意図を見ていく必要がある。

そもそも『古語拾遺』は平城天皇の召問に齋部広成が応えて撰上した書物であり、成立の背景には、同じ祭祀を司る中臣氏と齋部氏の間で祭祀における分掌上の対立があったことがあげられる。その意味で『古語拾遺』という書物には齋部氏の命運がかかっていたのである。まさしく広成にとって、衰微している自身の一族が朝廷内で生き残ろうとする意図が凝縮されていると言えるだろう。²⁰

だからこそ、アマテラスの片腕ともいえる存在であるタカミムスヒは非常に魅力的であり、また天の岩屋神話において、アマテラスを引き出すのに大いに貢献した自身の祖神フトタマを、タカミムスヒの子とすることで同じ祭祀を家職とする中臣氏と明確な差別化を図ったのである。²¹さらにタカミムスヒを親神とするのは、自分の氏族に限らず、先述した代表的な有力氏族の系譜にも置き、一族の再生を狙ったのではないかと考えられる。²²

次に『古語拾遺』成立の背景だが、歴史的に『古語拾遺』の成

立は九世紀に入ってからであり、これは『姓氏録』と同じである。九世紀に入ったばかりのころといえ、都が平安京に遷都されてから間が浅く、平城京時代から続く宮中祭祀を今一度再編させる必要があり、そうした政治的なプロセスの中で『古語拾遺』や『姓氏録』の編纂が始まったとも考えられる。

両書とも天皇の命（『古語拾遺』は平城天皇『姓氏録』は嵯峨天皇）によって編纂が開始され、九世紀に入って完成されたという共通を持つものだから。しかも、両帝は同母の兄弟である上、薬子の変で対立した史実がある。都を再び奈良に戻そうと企図した兄を、弟が迅速に先手を打ち、出家へと追いやったことで決着した出来事だが、そういった背景もあって『姓氏録』を弟嵯峨天皇が勅選として編纂させ、新都平安京における政治体制を盤石なものとする考えがあったのではないか。これらの背景と広成の一族の事情から編纂されたのが『古語拾遺』であり、それを参照して編まれたのが『姓氏録』であったと考えられる。

以上、『姓氏録』を中心に『古語拾遺』を引用しながらタカミムスヒの考察を試みた。先述したように、『姓氏録』に記される有力氏族の祖神の多くは「ムスヒ」という天神系であることを示しており、その中でもタカミムスヒは特別な存在として位置付けられていた。そしてそれは、同時にアマテラス（天皇）の下で従い、行政に携わることの正統性を持つとしたことに他ならない。加えて、先述し

た五氏のように、ムスヒ神を祖と掲げる氏族は天皇との結びつきが非常に強固なものであり、誰もが安易に掲げることはできなかったものであるとも言えるだろう。

このように『姓氏録』は広成が編んだ『古語拾遺』を参考にしていることがわかった。

それに加えて、広成にとつては齋部氏が衰微していた状況もあり、それを打開するチャンスとして編纂に取り組んだ彼にとつては文字通りの力作であったはずだ。

また『古語拾遺』の冒頭にあるように、「国史・家牒」から「遺りたる」フルコトを拾い集めたいという体裁で成り立ち、それを「拾遺」することは律令に基づく神祇官祭祀の現状を批判する根拠を作ったかっただけという齋藤英喜の指摘もある。²³⁾

このような書物を『姓氏録』が基にしたのは、『古語拾遺』が兄平城天皇の勅命の下で編まれた書物だからであろう。兄の御代で完成した書を参考し、弟の御代に氏族名鑑を完成させることで、一連の作業であることを示し、新たな都での人事役職を決める基準にしよと考えていたのかもしれない。両書の関係が二人の兄弟天皇の発意の下に成立していることが大きな意義を持つと論者は捉えている。

こうして『古語拾遺』は同じ祭祀を分掌する中臣氏に対する反発心と齋部氏が専門とする祭祀儀礼が、天皇即位に際して必要となる「天璽の剣・鏡」の安置場所すなわち殿祭（大殿祭）であることを掲

げ、中臣氏よりも天皇（アマテラス）に近い存在であることを誇示するために、その根拠を『古事記』や『日本書紀』の神話に求め、タカミムスヒがアマテラスと最も近い存在であることと、祖神のフトタマがアマテラスを岩屋から引き出すのに貢献した存在である伝承を利用してタカミムスヒとフトタマを結びつけたと考えられる。

ましてや齋部氏は祭祀を家職とする以上、当時正史として重んじられていた『日本書紀』はもちろんのこと、当時は既にその認知度は受容低かったであろう『古事記』神話の伝承も把握していた可能性は高いと考えられるので、自分にとつて都合の良いように系譜付けやすかったことも推測できる。

そこで、論者は考えるのだが広成がタカミムスヒを利用するにあたって最も注目した神話が『古事記』なのではなかっただろうか。

先述したタカミムスヒの記載用例を確認すると、いずれもタカミムスヒはアマテラスと共に存在している。これは『日本書紀』には無い伝承である。というのも、『日本書紀』にも『古事記』と同様にアマテラスと並称される記述があり内容も国譲りから天孫降臨神話と共通しているが、大半はタカミムスヒの単独が目立ち、その行動はアマテラスをも凌ぎかねないような姿である。それも「異伝」ではなく「正伝」である。もし、広成が『日本書紀』に限っていたならば、アマテラス以上の存在であるタカミムスヒを系譜に入れるとは考えにくい。ただでさえ、家職の宮中祭祀が中臣氏に掌握され、

朝廷内での存続が危ぶまれる中で、自身の祖神が天皇をも凌ぐことを示すのは致命的だからである。加えて『日本書紀』では全く伝承を記さないアメノミナカヌシとカムムスヒに対しても系譜を持たせることは難しいと考えるからである。⁽²³⁾

従って、広成が注目したのは『古事記』のタカミムスヒであり、アマテラス（天皇）とどのような関係であるのかを、最後に次でアマテラスとの並立という点から考察してみたい。

五、アマテラスとの並立

先述した記載用例のようにタカミムスヒは常にアマテラスと並んで高天原に存在し、アマテラスと共に諸神らに司令している。その際「高御産巢日神・天照大御神の命以ちて詔りたまひく……」という表記で、それをよく見ると二神の記載の順が途中で逆転している。

この記載の順番やタカミムスヒの行動を含め、かつての国家最高神はアマテラスではなくタカミムスヒの方ではなかったのかという指摘がなされているのだが、それについての詳しい考察は別の機会に譲るとして、高天原におけるこの二神並立とその順序が逆転する『古事記』の記述は重要視せねばならないと言えるだろう。

二神の記載順序が交代するのは、先述した用例番号「3」以降で、それまでの「1」「2」はタカミムスヒが先に記されている。「3」は派遣したアメワカヒコが復命せず、様子を探るのに誰を遣わそう

か思案している場面である。この直後にタカミムスヒはタカギ「高木神」という別名に転じて展開されていくのだが、この別名への転換と記載順の交代については、神田典城が論文「高木神の性格とタカミムスヒ」において、タカミムスヒがタカギへと転じる理由を含めて次のように論じている。⁽²⁶⁾

即ちアマテラスを宮廷神話のパンテオンの中心に導入するのは、タカミムスヒの存在があまりに強力であった。

そこで、基本的に二神併立の体裁をとる事にしたが、アマテラスを少しでも優位におく工夫をはかり、まず、天孫降臨の発意をアマテラスのものとし、以下、二神併記に当たっては、平定失敗ではタカミムスヒを主に立て、失敗から成功へ展開するところから、アマテラスを主に立てるという基本ラインを設定した。

しかし、アマテラス主位とするには、タカミムスヒの名が重いので、タカミムスヒの名のもとに習合されていたタカギに注目し、その習合が十分にこなれていなくて、タカギの機能の最も典型的な働きを示す「返し矢」の話を機に、タカギの名をクロゾアアップした。

右のように指摘した論拠として、神田は以下の六点を挙げている。

1、二神並立の順には、アマテラスを先に記すのとタカミムスヒが先に記すのと二通りがある。

2、タカミムスヒが先に記されている箇所はいずれも結果が派遣神の「裏切り」という失敗である。

3、アマテラスがはじめて先に記されるのは、アメワカヒコの様子を探りに行った雉の鳴女の派遣である。

4、天孫（イハレビコを含む）から口に出されるのはアマテラスが先で、タカギが後になっている。

5、祭祀儀礼の場においては、長くタカミムスヒ系が主役であった。⁽²⁷⁾

6、太陽信仰と巨木信仰には「鳥」と「雷」（タケミカヅチ）が深い関係にある。

以上、六点の論拠から神田は解釈している。最後の「6」の論拠については、世界的に見て鳥を霊的なものの運び役とする思想がある。

例えば北方アジアに位置するアルタイ諸族は「雷を鳥とする」観念が強い。⁽²⁸⁾ こうした「雷の鳥」はシャーマンの守護霊とし、樹木が稲妻に倒されるのは「雷の鳥」によって引き裂かれたからであるという伝承がある。「雷」から見ると、このアルタイ諸族にも『古事

記』に記されるタカギの「返し矢」と類似する伝承が次に挙げるブリヤートに伝えられる話である。⁽²⁹⁾

ある老人が、天上から地上の盗人を罰しようとして、矢じりの形をした石を投げつけた。その矢じりの形をした石は、稲光りのように落ちて行って泥棒にあたり、村中を火で包んだと言う。そしてこの老人は、雷の霊と見做されている。

この伝承は、「落雷」を天の神が「矢」として地上へ投げ下ろすことを表している。この伝承と『古事記』の返し矢と照らし合わせる、悪霊とは裏切り者のアメワカヒコであり、それを退治する神がタカギに対応すると考えられる。従って「矢を地上へ投げ下ろす」という行為は落雷の現象を神話的に示しているのではないかと考える。

「鳥」についても先述のようにアルタイ諸族は「雷を鳥とする」観念が強く、雷鳴はその鳥の羽の音や強雨は鳥のくしゃみであるとされる。

神話の「返し矢」の原因の一つとなる雉の鳴女による「鳴く」という行為がアメノサグメ（天探女）の「其の鳴く音甚悪し」「悪しき鳥」とアメワカヒコに射殺すよう促し、後に「返し矢」を被るというのが類似すると考えられる。⁽³⁰⁾

このように、北方アジアのアルタイ諸族の伝承を例として高木神による「返し矢」の伝承を考察したが、これがいかなる過程、経緯を経てタカミムスヒと結合したのかは今後の課題とする。

ただ、『古事記』神話におけるタカミムスヒは、最初アマテラスと共に高天原で司令神として鎮座し、アマテラスの意向を実現させようとあらゆる試みを駆使するが、いずれも失敗に終わり、最終的に別名のタカギという、字義通り「高い木の神」へと転じアマテラスを補佐する立場となる。別名に転じるきっかけとなったのはアメワカヒコ派遣の条以降で、先述したように「鳥」と「雷」が巨木信仰と密接に関わるからである。

そして九世紀に入り、アマテラスと共に天神の司令神として存在し、アマテラスを補佐し続けたこの神を広成が『古語拾遺』に取り入れ、自身の衰微した一族の再生を狙った。途中、タカミムスヒからタカギへの別名への変換については深く考えず、本文の記述通り「是の高木神は、高御産巢日神の別名ぞ」をそのまま受容したのである。

広成にとって、アマテラス（天皇）を凌ぎかねないような行動を伝える『日本書紀』よりも、アマテラス（天皇）を主位に置こうとする『古事記』のタカミムスヒ伝承を取り入れることで、天皇への絶対服従と忠誠心を示し、常時、祭祀と同時に天皇を補佐する正統性を諸氏族に表すのに利用されたのである。

六、おわりに

以上、タカミムスヒの全用例から問題を提起し、先行研究を踏まえながら『姓氏録』と『古語拾遺』に「月次祭」といった宮中祭祀、さらにわずかではあるがタカミムスヒと別名高木神の転換問題についても北方アジアの伝承を例に挙げながら、『古事記』神話におけるタカミムスヒの役割を論考してきた。

タカミムスヒは高天原でアマテラスと共に鎮座し、アマテラスの意向で行動する政治的な役割を担った天神の中心的存在の司令神であった。そして九世紀以降になり、天皇の中央集権下において、氏族たちは権威のある官職に就くことの正統性を求めたと結論付けたが、タカミムスヒと高木神との別名に転ずる問題などについては詳しく考察しなければならないと考える。

また『日本書紀』におけるタカミムスヒも、『古事記』と大きく異なる姿であるため、これについても説明していかなければならない。そうすることで、なぜタカギという別名が『古事記』に限定されているのかわかり、更なる『古事記』におけるタカミムスヒについて明確になるからと考えるからだ。

本稿ではタカギという神名とその行動についての考察を、北方アジアのアルタイ諸族から行った。今後も、高木神について引き続き掘り下げて考察することで、三浦佑之³¹⁾が指摘する「別系統の神話を

つなぎ合わせたということも考えられるかもしれない」という論をより一層進められるのではないかと考える。

これらの問題は今後の課題として別の機会に論考を譲りたい。

注

- (1) 用例の本文は『古事記』新編日本古典文学全集一小学館 一九九七年に拠った。
- (2) 「造化三神」とは『古事記』の「序」にて「參神造化」とあり、これがアメノミナカスシ・タカミムスヒ・カムムスヒの三柱を指す。
- (3) 『古事記』の葦原中国の平定でアメワカヒコ派遣後、この別名に転じる。これは『古事記』のみで『日本書紀』や『風土記』には無い伝承である。
- (4) カムムスヒが御祖と明記されているのは、出雲神話のスクナビコナの条でクエビコの発言から見られるが、「御祖」としての行動はサノヲが殺害した食物神オホケツヒメの死体から成った五穀を採取してサノヲへと渡し、地上繁栄の礎を築かせた他、オホナムチが兄八十神に殺された際に蘇生させるなど常に国神の側で働くのが注目できる。カムムスヒについての論考は三浦佑之「カムムスヒ考―出雲の祖神」『文学』13号 岩波書店 二〇一二年一、二月号に詳細有り。
- (5) 倉野憲司『古事記全註釈』三省堂 一九七六年
- (6) 尾崎暢殃『古事記全講』加藤中道館 一九六六年
- (7) 西郷信綱『古事記注釈』ちくま学芸文庫 二〇〇五年
- (8) (7)に同じ。
- (9) 溝口睦子『アマテラスの誕生』岩波新書 二〇〇九年
- (10) 倉塚暉子『出雲神話圏問題』『国文』お茶の水女子大学国語国文学会20号 一九六三年、十二月
- (11) 西條勉『古事記神話の謎を解く』中公新書 二〇一一年
- (12) オホクニヌシ(大国主命)・サノヲ(素戔嗚命)としたのは、『姓氏録』に「素佐能雄命六世孫大国主之後也」と明記されていることに依る。
- (13) 田中卓著『新撰姓氏録の研究』国書刊行会 一九九六年によれば、「地祇系祖神で注目せられるものは、要するに、大己貴命・豊玉彦命・稚根津比古命の三柱で、これは、紀・記の神代史における国神の伝承と相応するものであつて、(中略)大己貴命にはもともと地祇としての強い伝承が存してゐて、始祖が素佐能雄命である故に之を紀・記の神代史と勘案すれば、「天神」系と云へさうである。しかるに之を「地祇」に収めてゐるのは、大己貴命を天神と認めがたい理由が存したからであらう。紀・記の神代史に、大己貴命を「国神」と明記した箇所は一つもない。それどころか、素戔嗚尊を介して天照大神と結び、天神系への接近さへもが試みられてゐる。しかし、紀・記神代史の全体より感じとられる基調は、大己貴命を明らかに葦原中国の国神として描いてをり、そこにこそ、大己貴命の本質が存するやうである。」と論じている。
- (14) 本居宣長『古事記伝』岩波書店 一九九六年
- (15) (9)に同じ。
- (16) (13)に同じ。
- (17) (7)に同じ。
- (18) ここに記した五つの代表後裔氏族は、最も有名な氏族としてよく掲げられるので、それに依った。
- (19) 溝口睦子『王権神話の二元構造』吉川弘文館 二〇〇〇年
- (20) 飯田勇『古語拾遺』の論理と方法』『古代文学』37号 古代文学会 一九九八年、三月
- (21) 『古語拾遺』を見ると、中臣氏の始祖はアメノコヤネ(天児屋根命)で、その親神はカムムスヒであると系譜に付している。対して、広成の氏族齋部氏の祖はアメノフトタマで、その親をタカミムスヒとしているので、明らかな差別化が見て取れる。
- (22) 例えば、タカミムスヒを親神とする始祖を持つ有力な後裔氏族は、注(18)の代表の他、葛城氏・日置部・荒田直・日奉氏といった氏

族が挙げられる。

(23) 斎藤英喜『先代旧事本紀』の言説と生成』『古代文学』37号
古代文学会 一九九八年、三月

(24) 『日本書紀』におけるタカミムスヒの行動箇所は『古事記』と同様に「国譲り」から「天孫降臨」(第九段)が専らだが、その伝承は「タカミムスヒ・アマテラス」(あるいはその逆)といった二神並称ではなく、大半のことがタカミムスヒの独断のものであり、アマテラスは一書(異伝)にてその力にあやかるような記述がされている。しかも、天孫降臨の発意はアマテラスではなくタカミムスヒであると、正伝にある。

(25) この指摘は、注(9)と注(19)の書の他、岡正雄「日本民族文化の形成」『図説日本文化史体系1』小学館 一九五六年、上田正昭『日本神話』岩波新書 一九七〇年、松前健「鎮魂祭の原像と形成」『日本祭祀研究集成1』名著出版 一九七八年などがある。

(26) 神田典城「高木神の性格とタカミムスヒ」『古事記年報』24号
一九八一年、三月

(27) 阿部寛子「アマテラス祭祀の起源神話」『調布日本文化』11号
二〇〇一年、三月

(28) ウノ・ハルヴァ「シヤマニズムアルタイ系諸民族の世界像」田中克彦・訳 三省堂 一九七一年

(29) (28)に同じ。

(30) 「鳥」と「雷」が巨木信仰と密接に関わるからである。実際に地上を平定するタケミカヅチは雷神であり、アマテラスと共同ではあるものの派遣を命じている。また中巻の神武東征の条においては、イハレビコを先導した八咫鳥やタケミカヅチを派遣したのがアマテラス(太陽)とタカギ(巨木)によるものであったことも、先述した内容を支えるものと言えるだろう。

(31) 三浦佑之『口語訳古事記』文藝春秋 二〇〇二年